〈文化学会講演会〉

フィールドの風景 ―旅の原点を考える―

山形孝夫

山形孝夫先生　略歴

一九三二年仙台生まれ。東北大学文学部宗教学・宗教史学科卒。同大学院博士課程満期終了。宗教人類学専攻。東北大学講師（キリスト教史）、宮城学院女子大学教授・キリスト教文化研究所所長、同大学学長。その間、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究員としてレバノン、シリア、エジプト、エチオピアのフィールドワークに従事。

主要著書に『砂漠の修道院』平凡社（日本エッセイストクラブ賞）、『レバノンの白い山―古代地中海の神々』未来社、『図説　聖書物語　旧約編・新約編』河出書房新社、『治癒神イエスの誕生』小学館、『失われた風景』未来社、『死者と生者のラスト・サパー』朝日新聞社、山形孝夫・西谷修対談『3・11以後この絶望の国で―死者の語りの地平から』プネウマ社共訳『マグダラのマリアによる福音書』河出書房新社、『『ユダ福音書』の謎を解く』河出書房新社

今日は、フィールドの風景―旅の原点を考える―というテーマでお話をさせていただこうと思います。限られた時間の中で、焦点をしぼって、私がなぜ宗教人類学とか宗教学といった学問に首をつっこんでいったのか、そこから話をはじめますが、そこからはじめるにしても、それは私自身がなぜ宗教に関心を持つようになったかという話になって、必ずしも学問のフィールドの風景とは重ならない。私がどのように生きてきたかという話にすぎない。とりようによってはたいへんお聞き苦しい話になるかもしれない。はじめにそのことについてご容赦をお願いして、話に入らせていただきます。

では、いったいなぜ宗教などというものに興味をもったんだろうか。それが私の旅の原点にある。実は、私が八歳の時に母が死んだ、自ら命を断った。母は三七歳でした。そのことを私は自分の中に押し殺して決して口に出さなかった。家の中でも誰もそういう話はしない。親戚とも一度

も口にした記憶がない。母の死は、昭和十五年九月で、当時の新聞にも出たはずなんですが、そのことを私に教えてくれたクラスメイトもいなかった。知っていても、知らぬふりをしていたんでしょう。友達はみんな知っているだろうと思いながら、諮ねられないことを幸いに、一切口を閉ざしていた。ずーっと、沈黙を守っていた。しかし、私自身の中では、その問題はつねにどこへいっても心の中心を占めていた。ですから、なぜ私が宗教に関心をもったのかというと、もうその問題を除いて他には考えられない。だから、旅の原点は八歳の時に遡ると私は思っています。

それと、もうひとつこれも今だから言えることなのですが、母は命を断つ前に、予告をしていた。ちょうど一年くらい前ですね。母は末の妹を産んだ後、産後の肥立ちが悪く、ひどい不眠に悩まされていた。今なら、よい薬がいろいろあると思いますが、昭和十五年頃の話です。母は仙台の大学病院に一時入院し、治療をうけていましたが、その後退院して家で療養していた。そのようなある日、その時私は小学二年生ですが、記憶では九月のよく晴れた日、父に誘われて、母と一緒に山歩きをした。郊外のすすきの山をのんびり歩いた。父が先になり、私が真ん中、母が後ろからくる。そういう風景がずっと頭の中に焼き付いています。私の記憶の中ではまるで異界の風景のように、不安と一つになってどこまでも続くすすきの原が記憶に焼き付いている。

不安というのは、母がついてこないんですね。それがすごく気になって何度も後ろを振り返る。父はずーっと先の方を歩いている。ですから、父には「そんなに急がないで」って言いたいわけです。母には「もっと急いで」って言いたいのに言えない。母は、ふらふらと泳ぐように歩いている。空を見ながらね。子ども心に、退院したけどまだ本当じゃないんだろうなって……。つまり不安なんですよ。それなのに父はどんどん先へ行って森の中に消えていく。ふと、後ろを振り向くと母はしゃがみこんでいた。これは、と思って母のところにいって「どうしたの。遅れるから少し急ごうよ」と声をかけた。そしたらね、「おまえは、母さんにかまわず先に行っていいよ」って。私は黙って立っていた。そしたら、「母さんはね、ここにこのままじっとしていたいんだから」って。その時、私はね、母という感じじゃなくてね、そこに悲しいひとがね、目の前にね、一人いるって感じがしました。そんなふうに母を感じたのはその時が最初でした。この人は悲しみをかかえたひとなんだって思ったわけです。それでとにかく、私は母の前に、黙ったままじっと立っていた。そしたら母が立ち上がって歩きだしたんです。そのあとのことは覚えてないのですが、記

憶の中では、そのときはっきり死の予告を聞いたっていう感じなんです。

そのことがあってから私は母から目を離せなくなってしまいました。この人はいつ死ぬかわからない。そのように思うわけです。

そこからしばらく記憶がとんで、突然場面は小学校の教室に変る。二階の教室に私はいる。廊下のむこうからスリッパの音が聞こえてくる。遠くから、近づいてくる、だんだん私のいる教室に近づき、ドアの前でとまる。ドアががらっとあくわけです。担任の先生がでていって廊下でひそひそ話をしている。その声が聞こえる。私の耳に「山形がどうのこうの……」という話しが聞こえてくる。先生が部屋に戻ってきて「ランドセルをもってすぐ家に帰れ」という。そのまま私は家に戻るんですね。先生は何も言わなかったけど、私にははっきり、母の死であった。その日はですね。実は前の日に母と父と弟とそれから生まれたばかりの二ヶ月の妹が、松島に近い海のそばの母の実家に帰っていたのです。だから家には祖母と姉と私の三人だけ。そんな状況でしたから、家に戻れと言われた時に何が起こったか、私にはすぐわかった。母の死以外に、他には何も起こるはずがない。私は家に帰りたくなかった。

それで帰る途中ね、原っぱで蟲とりしながらね、十分ほどの道を、一時間も道草くってたどりついた。家には誰もいなくて、祖母だけが待っていた。「おまえの帰りがあんまり遅いもんだからみんな先に行ってしまった」というのです。で、どこに行ったとも祖母は言わない。私は採ってきた虫やカナヘビを飼育箱にいれてね。とても虫好きだったんです。昆虫の他にカナヘビとか蛙とか集めるのが好きだったんです。で、そういう動物を採ってきては飼っていたのです。それで採ってきたものを箱に移していたら、祖母がきつい声で「全部放しなさい」って言うのですね。そんなきついことをいう祖母じゃないし、祖母も生き物が好きで私がいろいろ世話をする時には手伝ってくれていたし、母も好きだったんですが、そういう祖母が言うので、私はなぜかしゅんとして、もうこれは間違いないっておもった。

それから親戚のおばが私をむかえにきて、タクシーに乗せられて、そのころタクシーは珍しいですからね。仙台の街から海の見える松島の近くまで、一時間くらい走ったでしょうか。私はただじーっと窓の外ばかり眺めていた。おばが何が言ったかもしれないのですが、私は何も聞いてない。記憶からまったく抜け落ちている。そして辿り着いたところは見たこともないところで、赤レンガの建物の入口、そこで降ろされて、そして人だかりの輪のなかへつれていかれた。そして親戚のおばから「はい」っと言って持たさ

れたのが、「箸」。その「箸」で私は骨を拾った。それは骨。母ではない。母はどこにいるの。母は、どこに行ってしまったの。その母のいるところを確かめたい。そのような思いが、私の人生の出発点にあるのですね。そこから私の人生は、はじまったように思うのです。

思えば、母の死について、誰も語ってくれなかった、だが、それが私にはむしろよかった。父もとうとう語らずじまいに七八歳まで生きて死んでいきました。死の床についた時、苦しそうな息のしたから、私を傍に呼んで、「何か聞きたいことがあるだろう」といいました。私は胸が詰まりました。父に聞きたいことなら、山のようにあったのです。でも、私は言いました。「前はあったけど、いまはない。いまはもうなーんにもない」と。なぜ、あの時、聞かなかったのか。いまでも、そのように思うときがあります。でも聞かなかった。父だって、どんなに苦しかったろう。そう思うと、もうそれだけでね、もうよいとね。

今でもそう思うのですが、ついに母の訃報はね、いちども聞かないままに、この歳まで生きてきた、と。六五歳になった時に、ある雑誌記者からなにか連載しませんかと言われて、自分の記憶に埋もれている経験を書きはじめた。書きはじめたらとまらなくなって、そのまんま三年八ヶ月くらい毎月書きつづけました。それが『死者と生者のラスト・サパー』（河出書房新社）という本ですが、一言で言いますと、それは私の記憶にある母の死の風景ですね。

ところで、旅のはじまりは、そうでしたが、ではどうして宗教と出会ったのか。はじめて聖書を読んだのは高校の二年の頃でした。ある日聖書を手にとって、なんとなく読んでいて、「賢い者の心は悲しみの家にある」とか、「死ぬ日は生れる日にまさる」とか、「悲しみの家にいるは宴会の家にいるにまさる」といった旧約聖書の「コヘレトの言葉」が不意に目にとまり、これは、いったい何だ、と思いました。私は母が死んでからずっと、ほとんど沈黙状態だった。今はどなたも私を無口とはおっしゃいません。子どもの頃は、無口でした。人とおしゃべりするようになったのは、大学に入って二、三年たってからなのです。これは、よく憶えている。それまでは、他人と話をするのを避けていた、というよりも、他人はね、私の経験したようなことについて何も知らない。そういう人と話をしても、仕方がないと思い込んでいた。傲慢と言えば傲慢。だけどね、その頃、小説を貪るように読んでね、人生の中で何が一番大切かというと、悲しみの「知」であると考えるようになっていた。それでそういう悲しみの「知」が自分の中にはあって、それがあるから私は私であるという、そのような感覚だった

と思います。それが、聖書に、「賢い者の心は悲しみの家にある」と書いてあるのを知ってびっくりするわけです。えーっ、こういうことがしっかり書いてある。それだけではない。「悲しみの家にいるは宴会の家にいるにまさる」といった、いわば逆転の発想ですね。これが私には実に新鮮な驚きだった。読みすすむと、新約聖書のイエスは、「悲しむ者は幸いだ」とさらに明確に語っている。聖書では、「悲しみ」が主題なのだ、そう思いました。おそらく仏典を読めば仏教の経典にも同じようなことが書いてあるに違いないのですが、その頃、日本は敗戦直後で、仏教とか神道といった宗教はもう話にならない。そのような雰囲気の中で、聖書を手にして、この「悲しみ」という言葉に出会った。そして、後先も考えずにキリスト教の洗礼を受けてしまうのです。これが、高校二年の暮れ。思えば、何と軽率で単純であったことか。

このようにして大学に進むのですが、私の入った大学の宗教学科にはとくにキリスト教専門の先生はおられなかった。東京の大学から集中講義で旧約聖書専門の先生が教えに来ておられたのですが、その頃から、私の関心は、キリスト教に向かいながら文化人類学という学問に強くひきつけられていました。それでドクターコースに進んだ時、とにかく日本での研究はこれ以上は難しいので、留学生の試験を受けてアメリカの大学に行くようすすめられ、セントルイスにある大学院大学に入学しました。しかし、実はそこからなのですね。私の中でキリスト教との格闘がはじまったのは……。いったい、キリスト教とは、どのような宗教なのか。私が聖書をとおして想像していたイエスの「神の子」運動との、あまりの違いに愕然としたのです。

すこし話をはしょりますけど、私が学んだのは、アメリカのニーバー兄弟の出たドイツ系の神学大学でした。そこで受講していたアメリカ文化論のゼミにひとりの黒人の学生がいたのです。その学生がある日ひょっこり私の寮にやってきて、クリスマスに自分の教会にこないかと誘われた。実は自分は牧師でこの大学の研究生である。クリスマスに、是非、君を呼びたいと。それで訪問の約束をしたのですが、クリスマスが近づいても何の音沙汰もなかったので忘れかけていたのです。そしたら、ある日またひょっこりやってきて、「もうすぐお前の部屋が完成する」って言うんです。なんてまあ大袈裟なことをと思いましたが、あとになって、本当に、自分の手でレンガを積み上げて、私のための小さなベッド・ルームをつくっていたことを知って、びっくり仰天したのでした。そのときまで彼がどのようなところに住んで、どのような暮らしをしているのか、私は何も知らなかった。この黒人の学生をとおして、私は自分の無知を

徹底的に知らされることになる。

セントルイスという町は、ミシシッピ川を境にしてですね、東と西に分断されています。西は白人地区、東は黒人地区。大学はもちろん白人地区。で、彼は東の地区から大学にやってくる。要するにミシシッピ川が国境なのです。彼は、帰りしなにくるくるまるめたマガジンを差し出して、今度家に来るときまで読んどいてくれと言っておいてった。その夜、私はそのマガジンを開いて、そこにあるデュ・ボイスという詩人でもあり、思想家でもあるアフリカ系アメリカ人の書いたエッセイを読んでですね、このアメリカに白人の歴史とはまったく違ったもうひとつのアメリカの歴史があることを知りました。その話をしていると長くなるのではしょりますけど、一言で言うとリンカーン大統領なんかは真っ赤なうそっぱちの政治家であったというのです。もう冒頭から、リンカーンという黒人解放はデタラメだったんだと。北軍と南軍とが激突して、戦えば完全に北軍が負ける。そのことがわかっている状況で、どうすれば北軍が勝てるか、そのためには、戦力が必要だ。南の黒人を北軍に集めることが必要だ。リンカーンはそのために黒人解放を打ち出した。つまり、戦略として打ち出した。その結果、南部に住んでいた黒人奴隷がいっせいに南を脱出しミシシッピ川を渡って、セントルイスにやってくる。セントルイスから先は奴隷解放区なのです。そこに辿りつけば黒人は北軍兵士になれる。銃を持った兵士になれる。それで、南部の黒人がいっせいに行動を起こした。で、あっという間に形勢は逆転する。南部があわてて金を払って黒人奴隷を徴兵しようとしたけど、手遅れだった。このようにしてリンカーンは黒人の大勢力を集めて勝つわけですね。

ところが、戦争が終わった後、どうであったか。南と北の白人が手を結び、黒人差別撤廃を宣言してそれで終わり。黒人を保護する政策どころか、そのための法律はことごとく撤廃し、黒人をまる裸のまま白人との競争社会に放り出した。もちろん市民権もないままに。黒人は抵抗することができない。むしろ奴隷制の状態より、もっとひどい状態に投げ出されていった。そのように、デュ・ボイスは書いていた。

私がアメリカに留学した年がリンカーン奴隷解放宣言から数えてちょうど百年目。アメリカ中の黒人が立ち上がり、キング牧師を先頭にワシントンにむかって百万人の大行進を開始した。まさにそういう時だったのです。皆さんも、あのキング牧師の名演説 I have a dream を記憶しておられると思います。

たまたまそのような時に、私は居合わせた。アメリカに行くまでは全くわからなかった。アメリカに行くまでは、

愚かにもアメリカという国はキリスト教の原点に立脚した民主主義の国家であると思い込んでいた。行ってみたらすごい差別の国。それでは、あの黒人教会の信じているキリスト教とはいったい何なのか。なぜ黒人は白人の信ずるキリスト教を受容しているのか。そこが不思議に思われてならなかった。アメリカにはもう一つのキリスト教があるのか。もしかしたらそれこそがほんとうのキリスト教かもしれない。一晩かけてデュ・ボイスをよみながらそう思いました。その黒人のキリスト教を知りたい、そう思いました。

そのようにして、私の招かれた黒人の教会で、私ははじめて、黒人のゴスペルを聴いた。それは黒人だけの歌なんですが、イースト・セントルイスの黒人教会に三日ほど滞在して聴いたはじめてのゴスペル・ソングでした。でも聴いてるだけでは、意味が皆目わからなかった。それで、あとで書いてもらった。歌はほとんど即興そしてジャズ風。で、こうタップを踏み手拍子をとり、よせあった肩を揺すりながら歌う。また歌い手が抜群。その中のひとりの若い女性が、泣きながら歌った歌が私には衝撃的だった。日本語に訳すとこうなります。「ああ、あの列車がやってくる。ああ、あの音だ。屋根のない貨物列車だ。ああ、あの列車だ。あの列車で母さんは運ばれていった。ああ、同じ列車がまたやってくる。今度は妹が運ばれていく。」これはどんな歌か。彼らが、根こそぎですね、アフリカから連れてこられて、アメリカで市場のせりにかけられて、そこで競り落とされて、まず母さんが貨車で運ばれていく。で、次の貨車で妹が運ばれていく。最後に自分が運ばれていく。私は、彼女の歌を聴きながら、泪がこみあげてきてとまらなかった。なぜか母を亡くしたときの記憶が、不意に蘇ってきて、泪がポロポロ。必死にこらえていましたが……。貨物列車で、運ばれていく母。その母は、どこへ消えていったのか。リフレインを繰り返すうちにみんな立ち上がって、肩を揺すり、スクラムを組み、ステップを踏み始める。それがだんだん、大きく広がって波のようにうねって、みんな泣きながら揺れている。その間、牧師は何をしているのかというと、牧師はただ「Yes! Yes!」と合いの手を入れて、まるでコンダクターのように会衆をエンカレッジしている。このようにして一時間、二時間と続く。これが黒人の教会の礼拝なのか。強烈な経験でした。

牧師の説教とかそういうものはない。礼拝が終わると、みんな箱に賽銭を入れる。お賽銭というか、まあ献金ですね。それがね、みんな硬貨（クォーター）。チャリン、チャリンと音がする。それがまた悲しい。白人の教会は二〇ドルとか百ドル紙幣、それを音もなく入れる。籠の中はお札で一杯。黒人教会はクォーターでいきますからね。チャリ

ンチャリンがいくら鳴っても、牧師はそれで暮らせない。牧師はアルバイトをして、生計を立てている。このような人たちの教会なのです。

外形はきちっとした赤レンガの建物です。もともとは白人の教会であった。その白人が、黒人の数が増えるにつれて郊外に逃げ出して、結果として黒人だけが残った。そのようなこともアメリカに住んでみて初めて分かったことでした。一九六〇年代の初めです。このような経験をとおしてキリスト教は弱者の味方でありながら、一方において差別を拡大する宗教ではないかなと思うようになりました。白人の書いた書物をとおしてだけキリスト教を学ぶと、とんでもない間違いを起こすかもしれない、そう思うようになりました。

ちょっと横道にそれますが、今、なぜか『武士道』が盛んですが、その御本家の新渡戸稲造が、若い頃アメリカに留学して、ちょうど私と同じように白人の教会に出席してすごく失望し、そこで悩んでいたときに、たまたまクエーカー教徒の集会に行ったのです。クエーカーというのは英国国教会に反抗して生まれたプロテスタントの一派ですが、やがてプロテスタントの権威主義にも反抗し、全く独自の道を歩みはじめるキリスト教徒です。彼らは教会堂をもたない、普通の家に集まって黙想する。牧師もいかない、つまり聖職者はいない。洗礼もなければ、ミサつまり聖餐式もない。要するに儀礼は一切なし。聖日に集まって、ひたすら黙想をする。沈黙の祈り。人の前で声に出して祈ることをしない。声に出すと偽善になる。それでひたすら、「内なる声」に傾聴する。そういう集会に、新渡戸稲造は参加して、はじめてキリスト教に納得する。彼は後に書いている。キリスト教の一番重要な本質は、「悲しみの門」をくぐるということであると。私からすると新渡戸は「悲しみ」を知るということを通して、キリスト教に入っていった。そこには十字架の犠牲も、原罪も、復活さえも、声高には語られていない。新渡戸稲造の書いたものを読んでいて、その辺のところがよくわかるように思いました。ああ、この人も私と同じような経験をしたのだなと。

それで話をもどします。「ああ、あの列車がやってくる」の話。このスピリチュアルに流れているものは、どうしようもない深い「悲しみ」なのですね。奴隷には、戦う術がない、抵抗する術がない、ただ、悲しみを深めていくしかない。それを牧師は、しっかりと受けとめている。そして、最後にね、一言こう言った。「私たちはけっしてして忘れない。あなたが苦しんで、家族を愛して、死ぬまで戦い続けたこと。そのことを私たちは忘れない。決して忘れない」と。こう言って、悲しみの歌をしめくくる。これがメッセ

ージなのです。たった一言。ああ、本当にそうだ、と私は思いました。あの聖書の中の、イエスと同じだと思いました

それで、二年間の留学を終えて日本に帰ってきてですね、母校の東北大学で、キリスト教史の講義を担当することになったとき、いろいろ悩んだ末「悲しみの知」を主題に講義を組み立て、考えつづけていこうと心に決めました。単なる「悲しみ」ではない、「悲しみの知」。それが『治癒神イエスの登場』という論文となって岩波の「思想」に掲載され、いろいろな方から反響をいただいたときは嬉しかったですね。問題の焦点は、イエスの奇跡ですが、底辺にあるのは「悲しみ」。病める者、死にゆくものの「悲しみ」です。その「悲しみ」から、いかにして自由になるか。どのように解放されるか。その深化の過程を「悲しみの知」としてとらえる。聖書では、イエスの病気なおしの奇跡物語がその典型ではないか。ここに『治癒神イエス登場』の意味がある。そう思うと、こんどは矢も楯もたまらず治癒神イエスの系譜を追跡して、レバノンから、ギリシャ、エジプトそしてエチオピアへ飛びました。私のフィールドは、一挙に中東からアフリカへと拡大していきました。レバノンについては、『レバノンの白い山』（未来社）に書きましたので、省略します。ここでは残りの時間をエジプトのコプト修道院をスライドでご覧いただきながら、ヨーロッパやアメリカのキリスト教とは、明らかに違ったもう一つのキリスト教を紹介したいと思います。

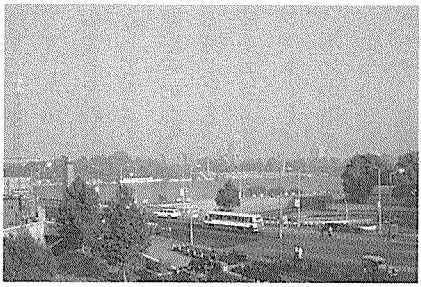
さて、そのコプト修道院なのですが、はじめにですね、カトリック教会から異端として切られてしまった東方教会のひとつであることを思い出していただきたい。イエスは神であって人であるというのが、正統主義の立場ですが、神であっても、人であってもどちらでもいい、「神であって人」それさえなければ、あとはあまりこだわらないというキリスト教がそこにある。たとえばマリアは神の母か、それともキリストの母か、という有名な論争があるのをご存知でしょうか。さてどっちでしょう。神の母と答えたくなりますね。でもそう答えると異端。正解はキリストの母なのです。本当はどちらでも同じですよね。ところが違う。なぜかというとローマの正統主義キリスト教からすると、もしも神の母と答えると、「神の母は神」でマリアは神になってしまう。一神教の立場からするとそれは困る。ところがキリストの母と答えると、キリストは人であって、神でもある。だからマリアは人間イエスの母、つまり人の母で神ではない、ということになる。神の母は神。人の母は人。まことにトリッキィですが、この問答でおびただしい数の

修道士が処刑されたり、追放されたりした。そのような状況の中で、ローマ・カトリック教会から異端として追放・抹殺された集団がエジプトやシリアに今でも存在している。コプト教もそのひとつ。では、スライドに入ります。

①これはですね、カイロの中心街、タハリール広場のあるあたりです。

遠くにナイル川がみえますね。橋の左手が西方です。それでナイル川を挟んで、古代エジプト人は西と東と、大きく二つのクニに分けて考えていた。西のクニは死者たちの住むところ。東は、生者の住むところ。これが古代エジプト人のコスモロジーの基本です。

②どんどん西に移動していきます。ナイル川から、砂漠に水を引いて耕作地が広がっている。ナツメヤシの木が茂っている。農民がロバを使って仕事をしている。



①

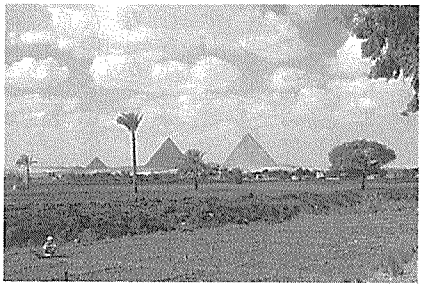
②

③さらにどんどん西へ西へと行きます。らくだというのは、一日の行程が大体二五キロから三〇キロといわれているのですが、このピラミッドの見える辺りはカイロの中心から二五キロぐらい。町の中心部かららくだで一日がかりの行程のところにあるのです。これがギザのピラミッドです。

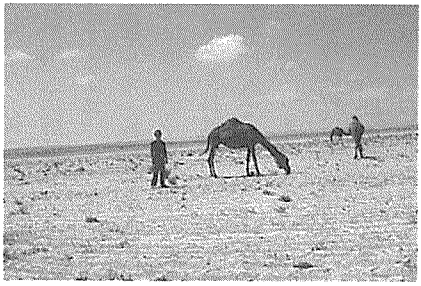
④ナイル川から水の引ける範囲が農耕地、もう水のとどかないところは、乾燥地すなわち砂漠地帯ですね。らくだは後ろの両足を縛られて放し飼い。

⑤かつてはこの辺は夏になると一面にパピルスが生えた湿地帯。そのパピルスが生えなくなったのは、アスワンダムによってナイル川の水がコントロールされた結果です。この辺はもう砂漠地帯です。

⑥そこをさらに、西へ西へと行きます。写真は砂漠の民、



③



④

ベドゥィンです。ベドゥィンというのは「砂漠に住む人」という意味です。羊を五〇頭くらいまとめて草のある飼場を探しながら、水場から水場へと移動している。これは主として少年の仕事。

⑦どんどん西へいきます。この辺りはベドゥィンの幕営地です。日中は、おばあちゃんしかいない。男たちは、みな出払っている。

⑧この辺りはオアシスです。女の人たちがパピルスを運んでいる。何に使うのかというと、畑の柵囲いです。

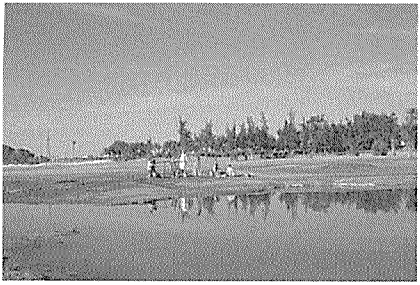
⑨これがエジプト流の井戸端会議。井戸端はいつも若い女性でにぎやかです。

⑩修道院が遠くに海に浮ぶ舟のように見えてきます。だんだんと近づいてきます。砂漠のどまん中にどうしてこんな大きな修道院があるんだろう。だいたい起源は四世紀から五世紀。最初の原型が日干しレンガで作られたと言われてます。この修道院が私の調査対象となったワディ・ナトルンの「聖マカリウス修道院」です。ミナレット（塔）がみえます。砂漠の燈台のようです。

⑤

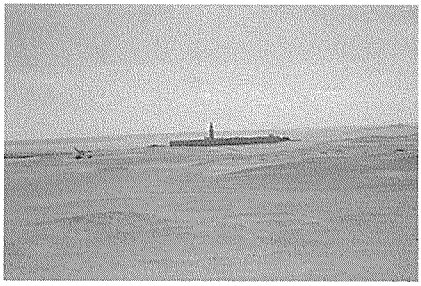
⑥

⑦



⑨

⑧



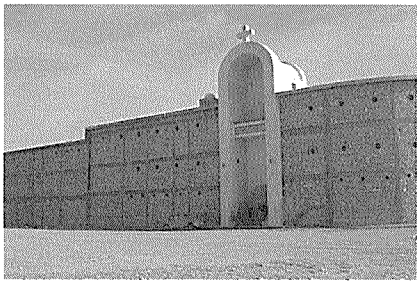
⑩

⑪これはゲートです。中へ入ります。

⑫僧院の中庭。修道士たちがゲストを交えてお茶を飲んだりして休むところ、ジャスミンの花が一年中咲いています。すばらしくよい匂いが立ち込めています。修道院の中は大理石がぴかぴか。修道士たちは例外なく大学卒。エジプトではエリートですね。法律や、医学や畜産学・土木学をやってきた人。コンピューター専門の工学士もいました。そういう人たちがここでね、深い井戸から自家発電で水を汲み上げて自給自足の暮らしをしている。

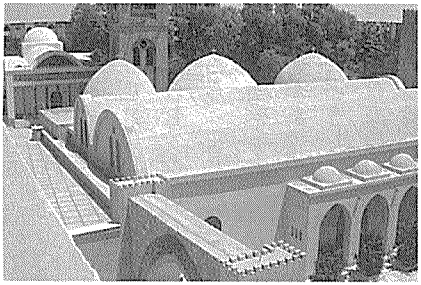
⑬この丸いねぎ坊主みたいな屋根、十字架が見えますでしょ。教会かと思っていたんですけど、実は聖者の埋葬地なんですね。円形屋根のトップに十字架をたてるのは、ここが墓地だというしるしです。ということは、修道院の全体が実は壮大な墓地。なぜかというと、そこにはイエスの「ホスティア」（聖遺体）がシンボルとしてあるからです。そこで、イエスの遺体を拝領する。シンボルであるぶどう酒とパンを拝領する。基本的にそういうシンボリズムが、コプト修道院を支えている。住みついてみて初めてわかったことですが……。ナイル川の西の砂漠というのは、もともとが死者のクニ。その死者のクニの中心に、イエスの遺体がある。だから修道士の使命は、イエスの遺体を守ること、基本的につまり墓守りなのです。命を懸けて守る。それが修道士の使命。

⑭まわりをぐるーっととりまく巨大な壁は内側から見ると、それぞれ個室になってる。あの窓のついているところ。あれは一つずつ全部部屋なんですね。私もその中に長いときで三ヶ月くらい住んでました。七月の初めから九月の終わりくらいまで五ヶ年ほど暮らしていました。そして、修

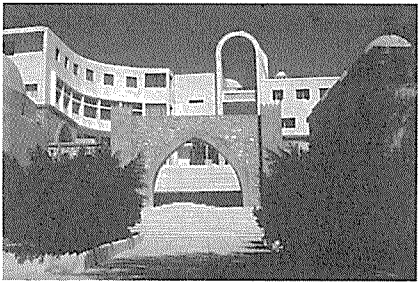


⑪

⑫



⑬



⑭

道士のひとりひとりに修道士になった動機は何なのか。いま、どういう仕事や修行をしているのか、といったことを一人一人に聞きだしていたのです。はじめみんな口を硬くして語ることをしなかった。教えてくれない。自分はナイル川を東から西へと渡ったときに、これまでの自分に訣別した、つまり古い自分は死んだのだと。古い自分については語りたくない。ここにいるのは別人の私なんだ、という考え方。ですから、誰の子どもですか、どこで生まれましたかということについては口を閉ざす。それをどのようにして引き出すか。それだけのことに、三年ぐらいかかりましたね。あるきっかけで、新顔の門番と仲良くなった。君はどうしてここにやって来たのか、その動機を聞いたら、実は自分は高校の教師をしていたが、イスラエル軍との戦争で三年間戦争に行っている間に、恋人に裏切られた。恋人が別の男と婚約しちゃったと言うんですよ。どう思うかって言うから、そういうことは日本ではよくある話だと言ったんですね。そしたらね、日本はそういうことがよくある国なのかって。私は、日本ではよくあるよって。この私だっていつまでもここにいたら帰ったときにはもう家には誰もいないかもしれない。そういう国さって言ったら、ひどく同情してくれました。それで私は言いました。君が三年間イスラエルに行って戦っている間に、恋人が別の男性に走ったとしても、ちっともそれは責めるべきではない、むしろ祝福してあげなさいってね。そしたら彼はね、お前はなかなかいい事を言ってくれるって言って自分の心境を話してくれた。自分は今では怨んではいないけども、恋人に裏切られた時には、もう半狂乱の状態で、学校の教師をしていたけれどそれを辞めて、田舎からカイロにでてきて、職もなくホームレスになってフラフラしていた、と。そんなときある日、夢をみた。夢の中にね、とつぜん聖母マリアが現れた。マリアさまが現れて、お前の探している花嫁はここにはいない、と言われた。

　で、彼ははっと目が覚めた。夜がしらじらと明け染めていた。自分は今マリアの夢を見たのか、と。エジプト人にとってはね。夢というのは、リアリティがあって、現実の生の事実よりも夢の方がどっちかと言えばより現実性が高い。これはエジプトに限らず中東に行くとそういう感覚が強いのです。例えば私がエジプトにやってきて、エジプト人の友人を前ぶれもなしに突然訪ねていきますね。そうすると「お前が来るのはわかっていた。」って言うんですよ。「いったいどーして。手紙も何も書いてないのにわかるはずないじゃないか。」「いや、お前の夢を見た」って言うんです。で、「へー、夢でわかるの？」って言うとお前が今日来るってことは夢でわかった、と。確かに私が来た時に彼

はちっとも驚かないで「待っていたよ」と言うのです。思わずはぁーと、あいた口がふさがらなかった。そのようなリアリズムがある。だから彼はね、マリアの夢を見て「お前の探し求めるものはここにはない」という声を聞いた時にほんとだと思って、その日のうちにこのナトゥルンの涸れ谷の修道院に向かって一人でやってきたわけです。そして修道院の門の前に立って、自分を修道士にしてくれって。そしたら、あっさり断られた。で、断られたらほんとは帰らなきゃいけないんですけど、彼には帰る手だてがない。それでしょうがないからね、誰かが脱ぎ捨てていったガラベイヤ（黒い僧衣）をまとって、そして農作業場の門番になりすました。「そうだったのか、君は本当の門番じゃなかったのか」って言ったら、「本当の門番ではない」って。それからしばらくしたら彼はちゃんと修道士になっていたので、あーよい友達ができたなと思ってね、あるとき別の修道士にね、ここで素晴らしい修道士と出会ったと言ったんですよ。「それは誰だ」って言うから、いや、名前は言えない。情報は非公開であると断った上で、修道士になった理由は、失恋で、ある夜彼は夢を見た、と。それはマリアさまの夢で、それでこの修道院を訪ねて、修道士になった。そのような人がここにいると言ったんです。そしたら「それは誰だ」「いや、絶対に言えない。私の口はかたいんだ」って。そしたらね、「その話、お前はほんとにいいと思うか」っていうからね、「いやー、いいんじゃないですか」って言ったんですよ。そしたら、じゃあこういう話はどう思うと言って、彼はある話を切り出した。それで私はメモしながら聞いてですね、これでとにかく修道士の動機について二つ採取できたわけでしょ。で、夜になってそれを一生懸命整理しなおして、記録したわけです。そしてその次の日に、その話を別の修道士に話しました。「この修道院にこういう人がいるんだけど知ってるか」って言うと、「知らない。それは誰だ」って。「いや名前は絶対言えない。」するとその人は話しはじめた。「大学を卒業しようとしていた時になぜか不安にになって修道院に一人でやってきた」と。それで砂漠の中を歩いてくる途中で砂嵐にあって方角がまるでわからなくなり、岩山の洞窟に閉じこもって一晩寝た。そしたら夜に、砂嵐が止んで外へ出てみたら白サギが一羽砂の上に倒れていた。飛んだままの状態で羽を広げて倒れていた。彼はね、ああこれは、自分の死んだ母の身代りだと、そう思ったと言うのです。夢の中でね、母が泥まみれになって自分の進む道をそっちじゃない、こっちだって教えてくれたのだと。そこで目が覚めて洞窟の外へ出てみたら白サギが羽を広げて死んでいた。この白サギの向いている方向ね。その方向をお母さんは指して倒れたのだと。こう思

って白サギの頭の方向に向かってどこまでも、夜の暗い砂漠を歩いて行った。で、どこまでもどこまでも行った時に、エジプト軍の戦車が演習しているところにたどり着いて、そこで救われて修道院に運ばれたというのです。それでそのまま修道院に住みついて修道士になった。彼の夢の中に現れた母と言うのも実はマリアさまなのです。マリアが自分を死から救ってくれた。こういうわけです。で、その話を記録にまとめて、別の修道士に話して聞かせた。黙って聞いていてね。いいとは思うけれどもこの話よりもっと良い話があるって言ってね。その三人目はお医者さんでしたけど、彼も自分のストーリーを話してくれた。

ま、こんな風にしてね。これまで難行していた記録の採集がだんだんはかどっていったんです。そこに辿りつくまで三年かかりました。

ところで話は変わりますがエジプトのコプト教徒の間に非常に大切な、印象的な神話が伝承されています。それによると、人間は、もともと天上界に住む光の子であった。それが、悪霊の誘惑によって、地上に落下した。落下した光の断片は粉々に砕け散り、肉体という名の牢獄に捕えられてしまった。それが人間の魂である。魂は肉体に閉じこめられ、そこでもがき苦しんでいた。そこからいかにして脱出できるかとあがいていた。それを、天上界の光の神が哀れんで、光の子を地上に遣わした。

光の子は、ひそかに人間の肉体の衣をまとって地上に降りてきた。そして肉体に閉じこめられた魂に向かって語りかけた。どうすれば肉体の牢獄から脱出して天国に戻れるか。それを一人一人に伝えて歩いた。想いだせ、光のクニを！想いだせ、天の故郷を！光の子は、「魂の窓」に語りかけ、天の故郷へ帰るための魔法の言葉を伝授する。やがて、使命を果たした「光の子」は、静かに天上に帰っていく。さて、とらわれの「魂」は深い迷いから醒め、悪霊から逃れて「光の子」のあとを追う。「光の子」が去ると肉体は崩壊し、あとには暗闇だけが地上にとり残される。それが肉体のうける罰である。

このような光と闇の二元論的な神話が、エジプトの、コプト教徒の間に流布している。このような救いの物語が、エジプトで発見された『マグダラのマリアの福音書』にもあるのです。おそらく、マグダラのマリアという女性もそういう神話的風土の中から生まれてきたのではないか。エジプトに限らず、例えば日本の竹取物語。私はけれど視野を拡大してみると、竹取物語を思い出しながら、不思議な気持ちになりました。どこかで深く通じ合うそれは、いったいどこからくるんだろう、と。

⑮この修道士が、私にとって忘れられないトマスという修道士、この人がいなかったら、物語採集は失敗に終わった。だからこの方は、非常に大切なキイ・パースンです。

⑯この人たちはボランティアとしてこの修道院にきてる若者たち。カイロからもミニアからもやってくる。

⑰修道院では鶏も飼ってる。

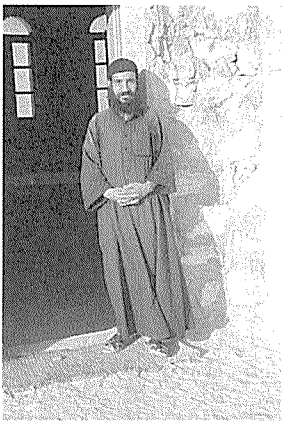
⑱木工品や家具も自分たちで製作します。机も作るし椅子も作るし、ベッドも作る。なんでも自分たちで作ってしまう。

⑲これは私です。三ヶ月くらいたった夏。顔が真っ黒に灼け、エジプト人よりよほど黒い。このままの状態で日本に帰って、大学の食堂で食べてたら、誰も気づかなかった。「私だよ」って言ったら、エーっとかいって。

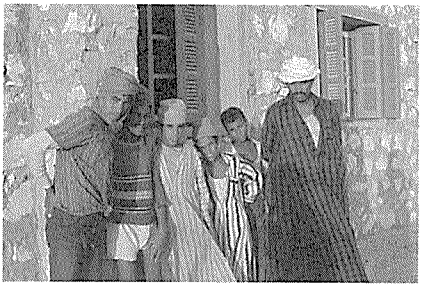
⑳ここからは本邦初公開です。二年掛かりで許可がでて、修道士の案内で聖所である秘密の洞窟に出掛けるところです。特別に撮らせてもらった。

㉑修道院を出て、砂漠をどんどん西へいきますとね、なんにもない砂漠に実は、この修道院の隠れた修行場がある。洞窟に一人でこもって断食をする。四十日四十夜、ちょうどイエスが荒野で悪魔の誘惑と戦いながら断食した期間と同じだけ、ひとりこもって断食をする。沈黙の祈りに明け暮れる。

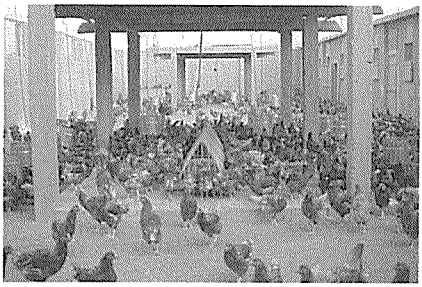
㉒洞窟は、砂嵐が吹き込んできますから砂をかき出さねばならない。いったい、断食をしながら、何をしているのか。仏教の坐禅のように、洞窟にこもって、天の一角から



⑮



⑯



⑰

⑱

⑲

降り注ぐ「光」の動きを見つめている、という。なぜ「光」なのか。「光」のクニが、彼等の帰ってゆく故郷だから……。

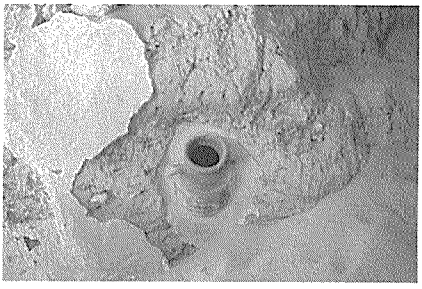
㉓洞窟の内部です。この壺の中にパンを入れて置く。ちょうどコッペパン一個分、それで一週間暮らすんですね。後は水だけです。水とパンは、週ごとに、修道士がとどけてくれる。

もっと続きますけど時間ですので、この辺でやめときましょう。最後に三つのポイントに絞ってまとめておきますと、①コプト教徒の信仰の本質的な部分に、「悲哀」というか「悲しみ」があるということ、これが中心ですね。先ほどの神話にあるように、人間の魂は、朽ち果つべき肉体に閉じこめられて、あがいている。天の故郷に帰ろうと、あがいている。なぜ、そのことが分かるのかというと、自分の心の一番深い部分に、光の子であったという記憶の痕跡があるからというのです。これが第②のポイントです。それは何なのか、答えはマチマチですが、要するにこの世のものではない聖なるもの、それを神と云う者もいればマリアという者もいる、とにかくこの俗世を超えた聖なる者、その聖なる者の手が、かって自分の魂に触れた、そういう記憶であると。その記憶が「悲しみ」のもとなのではないか。これを私自身の、あの母の死の記憶と比較しながら、あーそうか、と私なりに分かる気がいたしました。私の「悲しみ」もそうだったのか、と思いました。そして、あのアメリカの黒人教会で聴いたゴスペルも……。「悲しみ」とは、外典『マグダラのマリアの福音書』に限らず全ての宗教の根源にある原経験ではないかと。宗教とは「悲しみ」を癒すための文化装置であり、だから「癒しの知」なのではないか、と思うのです。日本のことわざにありますけど、「女

⑳

㉑

㉒



㉓

性は涙の数だけ賢くなる」と。男性はどうなのか。男性も同じなのではないか。ただ抑圧は男性よりも女性の方が圧倒的に大きい。その分だけ流す涙が多い。そして涙の多い分だけ女性は賢くなる。男性は逆で、女性を泣かせた分だけ愚か者になると、私は反省するのですが。これが第③のポイントで、修道院の洞窟修行は、そういう愚かな心の反省であり、それが「癒しの知」そのものであるように思うのです。

『ユダの福音書』について

最後になりますが、講演では、時間の都合でカットしたもう一つの大事な話題にふれておきます。

今年は、キリスト教界を揺るがす衝撃的な事件が続きました。ひとつは映画「ダ・ヴィンチ・コード」の『マグダラのマリア』、もうひとつは『ユダの福音書』です。この二つの福音書は、いずれも上エジプトのルクソールより北西よりのミニアに近い中エジプトで発見されたコプト語の古写本です。そのあたりは古くからコプト教徒の住む地域で、近くには修道院の廃墟もある。製作年代は、いずれも紀元二世紀半ば、おそらくは、地中海地域のキリスト教徒の間にかなり広範囲に流布していたのが、コンスタンチヌス帝によるニカイア公会議（紀元三二五年）以降ローマ帝国のキリスト教国教化にからむ激しい教理論争の歴史の中で、異端文書として葬り去られていった、キリスト教文書であります。

初めに、『ユダの福音書』から紹介します。ユダとは、ご承知のように、イエスをローマの官憲に売り渡した裏切り者のイスカリオテのユダです。新約聖書の福音書によれば、ユダは、イエスの十二使徒のひとりで、使徒達の金庫番を任されていたのですが、金に目がくらんで、イエスをローマ当局に売り渡した悪魔のような人物として描かれその末路は、マタイ福音書によると「縊死」（二七・三―一〇）であった。やがてユダは、金のためなら師をも裏切る陰険なユダヤ人の見本として正統主義を標榜するキリスト教徒のあいだに定着し、反ユダヤ主義の温床としてヨーロッパ全土を覆い尽くしました。ナチス・ドイツによるホローコーストがその延長線上にあることは、広く知られるところであります。ところが、そのようなユダ像は、初期キリスト教会が捏造した虚構のユダであり、真実のユダはそれとは全くことなるというのです。むしろユダこそは、イエスの最高の理解者であり、忠実な弟子であったと。そのことを証言する写本こそが、『ユダの福音書』なのであります。それによりますと、イエスの十字架の死は犠牲でもなければ、罪の贖いでもない。イエスにとって死とは朽ち果てるべき

肉体からの魂の離脱でしかない。いわば尊厳死に近い選択として描かれている。犠牲死とは、無関係である。いったい、キリスト教から十字架を除いたら、後には何が残るのか。これは、キリスト教の根幹をゆるがす大問題。その衝撃は大きい。だが、考えて見れば、イエスの死を罪の贖いとして捉える論理の筋立ては、人間存在の根底にアダムとイヴの「原罪」を認めるユダヤ神話の影響による。これが問題である。果して人間の本性は、ユダヤ神話の言うとおり、その根源において罪なのかどうか。『ユダヤの福音書』も『マグダラの福音書』もその答えはノーなのである。ユダはイエスの要請に従い、師の願望する肉体からの離脱に忠実に手を貸したにすぎない。そのためにイエスをローマの官憲に引き渡し、裁判の司直の手に委ねた。ユダは、裏切り者ではない、というのです。

第二の衝撃は映画「ダ・ヴィンチ・コード」で、センセーションを巻き起こしたマグダラのマリアという女性。この女性もユダ同様、正統キリスト教では「罪深い女」という根拠のない虚像で塗り固められてきました。だが、元をたどるとマグダラのマリアは、ヨハネ福音書が記録するように復活のイエスの第一の目撃証人であり、その位置付けはことのほか重要です。マリアはイエスの神の国運動に従い、ガリラヤからエルサレムまで行動をともにし、しかも、イエスの十字架の最後を見届けた女性として描かれています。ところがどうでしょう。そのマリアは、四、五世紀ころになると、なぜか福音書に登場する名の知れぬ「罪の女」と同一視され、やがて「改悛する罪ある女」、「心優しい娼婦」の見本として世界中のキリスト教徒の間に喧伝され流布されていくのです。このことは、ルネサンス期の絵画に見られるとおりです。

ダン・ブラウンの小説『ダ・ヴィンチ・コード』は、このようなマリア像をカトリック教会が意図的に作り上げた虚像であることを暴露しました。それだけでなく、実はマグダラのマリアは、イエスの「伴侶」であり、しかも二人の間には子供までいたというのです。レオナルド・ダ・ヴィンチは、そのことを知った上で、ことの重大さのためにそのことを秘匿し続けねばならなかった。その秘密をダ・ヴィンチは彼の多くの絵画のなかに、隠し絵のように、あるいは記号のように埋めこんで行った。そこでは、マグダラのマリアは、イエスに愛された唯一の女性であると小説はいう。たしかに、マリアがイエスの伴侶とよばれていた事実は、エジプトのナグ・ハマディで発見された古文書(フィリポの福音書』に記録がありますし、マリアがイエスのすべての弟子たちのなかで最高の女性使徒であったことを伝える古文書『マリアの福音書』(カレン・キング著、山形・

新免訳、河出書房新社）も発見されています。それによるとイエスはその霊的成熟のゆえに、誰よりもマリアを信頼し、他の弟子たちには決して語らなかった「救いの秘儀」をマリアにだけは伝えているのです。とすると、イエスの教えの最高の継承者は女性であるマグダラのマリアであったということになるわけです。正統主義のキリスト教からすると、イエスの教えの最高の継承者はペトロですので、これは衝撃的というほかない。なぜマリアではなくペトロなのか、この謎が前面に大きく浮かび上がってきます。キリスト教のローマ国教化と複雑に絡んだ歴史の暗闇であります。ただし、ふたりの間に本当に隠し子がいたかどうかは、記録からは全く不明です。小説は、その隠し子の血脈をたどり、南フランスのメロヴィング王朝にそれをさぐりあてているのですが、このあたりはフィクションという他ないですね。

それにしても、マグダラのマリアが、イエスからうけた「救いの秘儀」が問題です。そこには罪の贖いとしての十字架の死もなければ、アダムとエヴァの「原罪」もない。さらに重要なのは、イエスは救済者と呼ばれていても、「神」でも「神の子」でもなく、むしろ、ひとりの教師に限りなく近い。このようなキリスト教が、少なくとも紀元四世紀半まで、エジプトを拠点とする地中海世界に存在していた事実が、映画『ダ・ヴィンチ・コード』の上映をきっかけに話題として浮上し、キリスト教界を大きく揺り動かしている。そのことに私は、関心をもって今後の動きに注目している。